

---

# GAME (ゲーム) ~ 神々の遊楽 ~

間入糺管

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GAMEゲーム〜神々の遊楽〜

### 【Nコード】

N2128Y

### 【作者名】

間入糀管

### 【あらすじ】

主人公は今年の春、高校生となった。高校の寮に住むことになったが特に嫌という訳ではなく、ホームシックにもならなかった。しかしある日、実家に帰り、ノベルゲームをする。その時、主人公は「ゲームみたいに日常にも選択決とかがあれば、すっげー楽なんだけどな〜」と考え始める。そしてその日の夜、おかしな夢を見る。変に思いながらも、朝起きてみると選択決が出るようになっていた!?

## プロローグ（前書き）

プロローグ短っ！と思いながらの投稿。

許してくださいお願いします。できれば音で頂けたらな、と思います。

## プロローグ

(クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！)

この心の声を聞いただけでは、パソコンの前でノベルゲームをやっているように思えるだろう。だが、実際は違う。

青年には見えていた。青年の目の前に浮かぶゲームのような選択決が。それは青年にだけしか見えないものであった。

(この選択決か？いや早まるな。もしかしたらこっちの選択決かもしれない。それともこっち？ああ、もうっ！……そうだ！今日の事を思い出せば何か分かるかも！)

そう思いながら、青年は今日の事を思い出し始めた

## プロローグ（後書き）

すぐに投稿します。頑張ります。

## 第一話 能力（前書き）

ふうーやっと投稿。まえがきって以外に書けること少ないですね。それでは一話目です。

## 第一話 能力

ジリリリリ ジリリリリ

目覚ましの音が鳴る。目覚ましの設定は5時半、どうやら朝みたいだ。俺こと立花<sup>たちばな</sup> 九<sup>いちじく</sup>は意外に早起きなのだ。

(ん？選択決か？)

起きる

起きない

寮から逃げる

(……おい、なんだ。この選択肢。ふぎけんじゃねえよ。なんだよ、寮から逃げるって！)

もちろん、皆さんなら起きる、を選択するだろう。だが

(むむ、悩むなあ。)

この選択決、最善と最悪、どちらに転ぶか分からない、という感じのものでできている。

まあ、時々選択肢が一つしかなかったり、全部最悪に事が転んだりするのだが。

さて、なぜ立花がここまで悩んでいるかは、一度だけ起きないを選択したとき、クラスで人気の女子が起こしに来た、という伝説があるからである。

「やっぱり……」

立花はそう言いながら目覚ましに顔を向けていた。その目覚ましは、起きた時と同じ時間のままだった。

「俺が選択決を選んでは時間は時間はつごかないんだ。ならば！」

そう言いながら、立花は寝始める。

（うつしっしっしっ。それなら選択決を選ばず寝とけばいいんだよ。）

その時、ピッという音と共に、

起きる

起きない

寮から逃げる

勝手に選択決が選ばれていた事に気付かず………

「ふわぁああ、よく寝たぁ。さて選択決をつ!?!」

立花は虚空を驚きと絶望に満ちた顔でみつめる。

「ない! 選択決がない!! いや大丈夫! 我が眼前に出でよ! 世界仰天不思議パワー!!」

だが出ない。

「ははは、嘘だろ……? てことは、遅刻だぁぁぁぁぁ! 急いで学校に行かなければ!」

選択決

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そつだ、寮を出よう

「朝飯食べる時間ねえよ! ていうか、そつだ、京都行こう、的なりで寮を出させようとするなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁA A A A A A

あああああああああ！！」

途中悲鳴がアルファベットみたいな発音になったのは気にしない方針でいこうじゃないか！

「ん、そうだサボってしまえば。」

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よう

学校なんてサボってしまえ！

「あれ？こんな選択肢あったか？ま、いいや。」

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よう

学校なんてサボってしまえ！

「ふう、あの店うまかったな。隠れた名店ぼかったし。」

俺は学校をサボり外に出てから時間は経ち、夜飯を食ったところだった。選択肢に目の前の店に入る、というのがあったので、選択してみたらかなり美味しい料理店だった。

「これからもこの店行こうかな。」

そう思いながらいつも、学校に戻るルートとは違うルートで歩き出す。今日は、何故か遠回りして帰りたい気分だったのだ。



「プハあつ。美味しい。やっぱりコーヒーはブラックに限るよなあ。」

立花はケータイをいじくりながらコーヒーを飲み、その上いつもとは全く違うルートを歩いていた。

人間頑張れば3個の事を同時にできるものなのだ。立花はつまらないことに頑張っているが。

立花はいつもと全く違うルートを歩き始めた時、重要な事に気がついた。それは、寮までの道筋が分からない、ということだった。その事に気がついた立花はケータイをとりだし、急いで地図を開いてそれを見ながら歩いているのだ。

そして、途中で見つけた自動販売機で買ったコーヒーを飲み、今に

至る。

「それにしても、ほんつと選択決様様だよな。道を間違いかけたら選択決が出るしさ。最高だよもう。」

そう言いながら首をかしげ、手を肩の高さまで上げた。

その時、突如頭の真横を、ゴウツ！つと音を立てた明るいナニカが通り過ぎて行った。

「アツレエ？ゴメンネエ。君ニ当てようト、そたわけジャ、ないんだけどねエ。」

「おい！また口調がおかしくなってる！ていうかなんだ、そたわけジャって！」

声をかけてきたのは褐色の肌の色をした、亜麻色の長い髪の二十歳くらいの女と、最初にゴメンネエ、といっけて来、た……………？

（おいおいお、おの数が一つ多かったような気もするがなんだアレは！？コスプレか？コスプレですか！コスプレなんですか！？）

その男は、ファンタジーを夢見る者なら一度は見たことがあるような、長い耳がついていた。

「え……………エル、フ……………？」

「ソ、エロフ。僕の種族はエロフだよん。」

「エロフって言うんじゃない！ちよつとアレな種族になるだろう。」

「アレツてナニさ？アレって」

「え？あ、アレはその……あれだ、あれ。」

「あれじゃ分らないヨ。アレじゃ。」

「つまりだな、ああ〜もう！アレはアレなのだ！だからもうあれでいいんだ！」

「コレ、何て言うんだっけ？ツンデレ？いや、ヨク使ってるけどソレデハないな。ジャ、なんだろウ。」

「あ、あの？」

「ん？ああ、君がそういえばイタね。」

「ちよつと！アンタがイタね、って言ったから私までイタね、になつてでしょうがあ〜！」

「知らないヨ！ソソコト！」

「アンタ今日帰ったら日本語猛特訓！能力使つてやるわよ！」

「エツ？チヨツ、オマツ（笑）」

「……………」

「どうかした？おーい……………ねえ聞いてる？」

「ああもうっ。そんなことよりアイツ、始末するわよ。」

「オーケエ。」

「っーわけで死んで？」

「何がっーわけだ！」

「イイから死んでヨ。アソコの人みたいに、さ。」

そう言いながら、エルフの人は俺の後ろの方を指差した。

「そ、そ。」

え？あそこの人？

そう思いながら後ろを見ると

「ひっ」

そこには、火で燃やされている、人間の首があった。

「あ、あああ……………」

無意識に俺は首からもエルフの人たちからも遠ざかっていた。

「イヤア、僕たちもサ、神々のGAMEに生き残りたくつてさア。能力者、殺そうとしたんだけど……………ソイツ、自分の能力の気付いてなクツてサ、簡単二逃げてるトコロを魔法で一発ドカン、とね。」  
「そう、そしたらすぐ死んじやったわ。」  
「君も能力気付いてないのかな。」

能力…………？なんだそれ。俺しらねえよそんなの。ていうか、魔法つてなんだよ。魔法はファンタジーの中だけの特権のはずだろ……………  
ハハハ、ハハ、ハハハハハハ  
人間、ここまでヤバいと笑えてくるもんなんだな。まあいい。逃げてもヤツが言うことが本当なら魔法にやられるだけだ。それならここで潔く死の

「……………ちよつと、まて……………」

「ハイ？」

「なっ」

ちよつと、まて

どうして俺は奴らの言葉を信じる。神々のゲーム？なにそれ、おいしいの？な感じだよ。魔法？ただの電波かもしれない。エルフ？た

だのコスプレかもしれないだろ、んなもん。

なら、何故だ？俺は特段不思議パワーは何も持ってない。それこそ  
仰天するようななんてあったら、俺自分で自分を疑

仰天？不思議、パワー……………？

どこかで聞き覚えが……………！！！！

『ない！選択決がない！！』

違うところじゃないその次だ。

『いや大丈夫！我が眼前に出でよ！世界仰天不思議パワー！！』

あつた！

そつだよあるじゃないか。俺にだって不思議パワーが。電波なアレが！

「ク、ククククク」

「今度はドウしたんでしょっいか。」

「しょういかって何？まあ、どうせ怖さとかで狂ったんじゃないの？」

「狂った？ハハまさか。」

「「！！」」

「ああ、そうかもしんない。GAMEとか意味不明だけどさ。俺は能力もってんのかもしんない。」

だからさ。もういいだろ？いい加減出してくれよ、選択決を。今危機的状况なの、分かる？分かるよね。だからマジで出してよ。もう俺GAMEとかのなんかでいいからさ。

## 選択決

自分で頑張って倒す。

すばやく逃げる。

石を投げて逃げる。

クソ、いいのが全然ねえ！

(クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！)



「え？」

おい、ちょっと待てよ。なんで勝手に選ばれてんだよ。おかしいだろ！でも何で、何でさっきまでなかった選択決があるんだ。

「まあ何もナイミタイだし殺しちゃオウか。んじゃ行くヨ？精々避けテ逃げテ泣いテ喚いテ騒いでね？D? p l o i e m e n t d e  
陣 l' ? q u i p e 展開 m a g i q u e — B e r l i n H a u p t  
魔法 フア b a h n h o f ! !  
イヤール 「ヤツベ！」

エルフが意味不明な言葉の後にファイヤーボール言ってから、エルフが前に突き出した手のひらには、アニメなんかでよく見る魔法陣が回っていた。すると魔法陣から大人の顔より少しでかいくらいの火の玉ができていて、それを俺に向かつて！！

だがその瞬間突風がエルフと俺の間で起こる。

その次に見たのは

「あ……………」

闇だった。

黒い帽子に漆黒のマント、黒い、なんだ？あれ。変な模様が入った鎧と革鎧が合わさったようなもの。そして下も同じような感じ。靴

は黒いブーツのようなもので、すね当たりに折りたたまれた漆黒の羽があった。

「そこまでだ、アルス。」

「おや、魔法剣士ノ。」

どうやら声を聞くと女性のようだった。

「どうやら戦うしかないようデスね。」

「当たり前だ。」

「それでは本気を出しますか。Sommeil dans la  
terre de si grands esprits !  
Dormir dans le ciel et tel le  
grand Genie ! D'plioement de  
l' ? quipe magique ! 行け !  
「フン、D'plioement de l' ? quipe ma  
gique — Renforcement 《身体強化》 du co  
rps」

するとここだけが嵐に包まれた。しかし、すぐに青白い光に消された。その青白い光は女性の体から発せられている。だがこれだけは分かった。自分は助かったのだと。あの女性が殺しに来るかもしれないが、一時的に危機は回避できたのだと。

(あれ？安心した、ら意識……が……)

そして俺は、殺されるかもしれないという恐怖と不安に包まれなが

ら意識を手放していった。

## 第一話 能力（後書き）

がんばるぜいーちよーがんばるぜいーだから見捨てないでください  
おねがいます今アナタが私を見捨ててしまった場合呪われますが  
よろしいのですか？えそんなことをいわれたから逆に見捨てる？そ  
んなぁー！神は死んだ！

というわけです。見捨てないでくださいお願いします。

## 第二話 アギト(前書き)

間入糺管ですかなり遅れて投稿。  
パソコンが使えなかったんです許してください。

といつわけで三話目

## 第二話 アギト

「ん、んん……………」

目が覚める、朝みたいだ。

「あれ？知らない天井だ……………」

「…………知らないも何も、この家に貴様は一度も来ていないのだから、そうにきまっておるだろう。」

「へ……………」

隣に美少女がいた。14歳くらいだろうか。中学生の身長だ。

周りを見てみる。中学生くらいなのに、思春期特有の部屋ではない。弁当の殻が数十個と積み上げられ、テーブルにはパソコンがおかれ、タンスにテレビ、そしてベッド（今俺が寝ている。いい香りが…………。ハアハアクンカクンカ。ちよつ嘘だから振りだから通報だけは——つ！！）とまるで男子の部屋だ。

そして目の前にいる美少女。これが股（誤字ではない）、丸見えでシャツしか来ていなかった。

つまりアレだよ、健全な高校1年生でまだ、思春期の僕たちには刺激が強すぎるんだ。

「ブオオオツホオオオオオオオオ」（プシャアアアアアアアアアア）

「ごちそう様です……………」

ついでに言つと、その日死にかけるほどの貧血になった。

〈脳内日記〉

5 / 4 (水)

一日たった。病院に行きかけた。どうやらシャツだけという、家中だけでしかできないオシャレ(?)はいつもの事らしい。だから俺が家にいる間は常に危険な状態であり、この家を出るまで警戒しつづけないと、もしかしたら理性を失つて一線を越えてしまい、大人の階段を15歳で上る事になるかもしれないのだ。

「さて、話をするぞ。」  
「ああ、俺が今なぜこんな変態になってしまっているのか、だな。」  
「違う。一昨日の夜、襲ってきた奴らの事だ。」  
「……あいつらか」

今でも覚えている。まあ、当たり前か。エルフと褐色。殺そうとしてきた相手の事を覚えていない方がおかしいだろう。覚えていない人がいるとしたらその人には、人間の脳にある防衛反応が働いているかだろう。

「んで、あれは結局なんだよ。」  
「それはだな……」  
「ちよつと待て！」

うわ〜あつぶね。一番重要な事を聞くの忘れてた。

「お前何者だよ。ていうか何で一昨日の事知ってんだよ!」  
「……そうだった。すまない、私がバカだった。警戒されるのも当たり前だな。」

「は？警戒？」  
「どうした、気付いていなかったのか。私と話している時、ずっと身構えていたんだぞ。ただの学生だと思っていたのだが……フフ、なかなかどうして、面白い。」

「へ？いや、絶対違うと思います。昨日と同じ過ちを二度起こさぬようにしていただけだと思います。ハイ。」

違うんだよ！アンタが破壊力高すぎるんだよ！ていうか服着てくれよ、マジでお願いだから！！

「さてと、私が何者なのか、だったな。」

「あ、ああ。」

「それでは、自己紹介と行こうか。私の名前は霧裂きりさき、零火れいか、『ゼロ』と、そう呼んでくれ。」

「ゼロ？なんかコードネームみたいだな。」

「みたいではなく、その通りだ。名前を知られる事は、弱点を知れる事にも繋がる可能性があるからな。」

「弱点？なんだよ、それ。」

「フム、そこからは一昨日の奴らとともに説明をしたいのだが……。まあ、先に名前以外にも正体を教えなければ、な。」

正体？確かに、一昨日の事を何故知ってるのか分かってないもんな。

「それで、正体なのだが、こっちの姿を見た方が分かりやすいだろう。」

「こっちの姿？」

「？ 《我が半身よ》」

一昨日聞いたことのある感じの声だった。発音とかは違うけど、もっと根本的なところが一昨日のあのエルフの声と、どこか似ていた。

そして、霧裂さん　　ゼロ、と呼んだ方がいいのだろうか

か　　を中心として突風が吹き始める。次にそこにいたのは、一昨日見たことのある、

「あ…………え……………？」

闇を纏っていた。一昨日見たときと同じ姿形で、そこに立っていた。

「ひっ」

殺される。

そう思ってしまった。だって普通はそうだろ？魔法とかいう奴をバンバンと撃つたりしてないが、嵐を消したほどの奴が目の前にいるんだぞ？

選択決

何故かそばにあるナイフで刺し殺す。

ベッドの上にある枕をとりに行き、投げて逃げる。

何もしない。

せ、選択決か？おいおい、今度は究極の選択だな！どれもヤバいじゃないか。ナイフで刺し殺したら刑務所、というかまず刺せるのか？あんな奴を？どうやって？

ベッドの上の枕？ハハ、とりに行ってる間に殺られるだろ。

何もしない？ただ殺られてDEAD END一直線だろ。

そう思い、もう一度ゼロを見ると

「あれ？萌え〜？」

何故か、二次元になっていた。家も、家具も、何もかもが、だ。

「えと、選択決を選ぶときは、時間が止まって二次元になる、ってこと?」

.....。

「完全なノベルゲームな空間じゃん、それ。」

呆然とその空間にただただ立っていた。すると、ピツ、という音と共に、何もしないという選択決が勝手に選ばれた。

「え?おい、嘘だろ!」

もしかこれ、ノベルゲーム空間の中で選択決に入ってることをしたら、勝手にその選択決が選ばれんのか?それなら一昨日の勝手に寝るという選択決が選ばれたのも分かる。でも、このままだったら死ぬんじゃない?

ゼロを見る。よく見ると口がうごいている。もしか俺に死ねというのか。すみません、母と父よ。先立つという親不孝をどうか、許してください

「私は正体を明かした。次はそちらの番ではないか?」

「はい、分かりました。覚悟を決めました。」

「う、うむ。何の覚悟を決めたかは知らんがとにかく、何かを決めたのだな。」

「ああ、もう我が一生に一片の悔いなし。せめて、苦しまずに殺つてくれ。」

「.....お前は何か勘違いをしている。」

「あれ、殺さないのか?」

「よし、殺そう。」  
「うん、死のう。」

あの後、ちゃんと話し合っつて誤解が無くなった。ゼロは俺を助けに来てくれたらしい。

どうやらあいつは結構な悪者だとの事。詳しいことは今から説明してくれるらしい。

「そろそろ話しを始めるぞ。」

「ああ、分かった。」

「まず、何から話してほしい？」

「じゃあ、あのエルフ達が言っつてたんだが、神々のゲームってなんだよ？」

「神々のゲームか。もうそこから全てを話してしまおう。それでは話を始める。」

なんか説明つて聞くとだるーくなるけど、頑張つて聞かないとな。

「まず、神々のゲームだが、エルフが放つた魔法を覚えているか。」

「ああ。」

「あれは、能力というものだ。能力は

ゼロが言った話はこうだ。

人間をいつも神々は見ていた。神々は毎日に飽きていた。生命の数の管理。アカシックレコードに生命が至らないための管理。神はそれぞれ仕事が決められていた。が、反対に言ってしまうと、それ以外はすることがなく、毎日それしかできないのだ。故に神々は毎日に飽きていた。

そんな中、暇を見ては下界、つまりこの世界をのぞいていた。そしてお気に入りの人間を見つけては、幸運や加護を与えていた。その加護が能力である。

だが、とある神が娯楽少ないということ、ある遊びを提案した。それがGAME。加護を受けた能力者たちに戦わせる殺し合いであった。

能力は多種多様。加護を与えた神によって変わってくる。エルフは魔法の神に加護を与えられ、その代償にエルフとなる。特典は魔法の才能とぼうだいな魔力である。

あの褐色肌の女は影の神に加護を与えられ、その代償に色彩などに変化が起きた。特典は影に関する事ならばどんな事でも使える、影を薄くしたり、影縫いを使えたり、などである。

俺の場合娯楽の神に加護を与えられた。戦闘に関する能力はほぼ皆無である。才能があれば魔法なんかが使えるらしいのでよしとするが。

ゼロは戦の神だ。戦闘に関する事ならば、ほぼ万能である。その代わり飛び出た能力はないらしい。

「それは、なんとまあ」

「「ちょー迷惑な話だな(だろう?)」」

「ていうか殺し合いってことは」

「ああ、神がRPGのようにGAMEをセーブ、つまり一時休戦させるか、神に飽きさせるか、GAMEをクリア、つまり最後まで殺し合いを続けるかしないと、この殺し合いはおわらない。」

それって、すごくヤバいんじゃない。

「私の家はここだが、本当は地下に国会議事堂程の大きさの家をつくっている。」

「……………それって家とは言わないんじゃない……………」

「ああ、そうだ。暗証番号に指紋確認、専用カードを通さないと入れず、正しいルートを通らなければ、警報が鳴り、壁に仕込まれた重火器が牙をむく。ここには、私が助けた能力者が5人ほどいる。そのため私たちはここをこう呼んでる、アギトと。」

「アギト……………?アジトじゃなく?」

「ああ、最初はアジトと呼んでいたのだが……………一人がアギトと言い始めて……………な」

「その人の名前は?」

「……………もう、死んだよ……………」

うつ、気まずい……………。こんな時、どうするかなんて俺わからないんですけどオオオ!!

「まあ、それはともかく、だ」

「あ、はい。」

よかったー、あっちが仕切りなおしてくれたよ。

「お前もこのアギトに入らないか？」

「え？」

俺がアギトに入る？ということとは毎日このベッドの香りをクンカクンカでき……ゲフンゲフン、学校に行けない？最高じゃないか！

「でも、いいんですか？」

「ああ。それにお前能力者とは戦えないんだろう？」

「それがどうかしたんですか？」

「……お前、先ほどの話をちゃんと聞いていたのか？」

「ええ、もちろん。」

「なら、何故わからない。戦闘技能を持たないお前は、殺し合いで真っ先に狙われる可能性があるんだぞ？」

「あ……」

今気付いた。あれ？この場合俺アギトに入らないと、死亡フラグ満載のスリル満点生活ルート一直線じゃ！？

「入ります！というか是非入らせてくださいお願いします！！」

「う、うむ。」

「許可してくれんるんですね？ありがとうございますゼロ様！！」

「……そうと決まれば、今日のうちに他の五人と会っておくか？」

「はい。」

「よし、じゃあ付いて来い。」

そう言うと、ゼロは部屋の扉を開ける。すると、部屋の外は鉄の様

なもので作られており、学校の廊下の様な一本道がずっと先まで続いていた。

「えっとどこまでですか？」

「この廊下を渡りきって右に曲がり、そこからここと同じような廊下を」

「いや、もういいです……」

「そうか………すまないな、敵から身を守るためにはこうでもしないと無理だったんだ。」

「いえ、ちゃんとした理由があるなら……」

「じゃあ、行くぞ。」

「……はい。」

覚悟はしたが、やはりこの先が見えない廊下を渡りきるとなると、げんなりとしてきた。

コツコツと鉄のようなものでできた床と靴の衝撃で音を鳴らす。  
ようやく一つ目の廊下の終わりが見えてきた。

「こっからまた今のと同じようなところを……いつかノイローゼになつたりしませんよね？」

「一人いたな……そういう奴が。」

「うっそーん!!」

「大丈夫だ、迷子にさえならなければ、な。」

「………もつと怖いんですけど迷子になったらどうなるのでございましょう？」

「死ぬな。」きつぱり

「………」

「ついでにその迷子は秘密の通路に入り、重火器で八子の巣にされかけたな。」

「………もつ何も言いませんよ、ええ………」

「ここに5人がいる。」  
「分かりました。」

ゼロと俺が立っているのは赤い金属でできた扉の前だ。

「少し前から思っていたんだが、敬語は使わなくていい。なんと言  
うのか、むずむずする。」  
「いや命の恩人ですし……」  
「いいからやめろ。」  
「はいわかりました、分かった。」  
「よし、では入るぞ。」

ゼロが扉を開けるとそこには

「は……?」

呆けた声を出したのは誰だったか。

「あ、来たみたいだよ。」  
「ワオ、ゼロが言っていた新しい仲間って立花くんの事だったのね。」  
「おっす、オラ悟空、新たな仲間が入りましたー?」  
「どうして疑問なんですかー?」

「何でおまえがいんのさ、立花。」  
「ちよつ、それはこつちセリフだよ！」

そこに居たのは、小学生からの付き合いである俺の大親友井上 祐樹と、小学生の時知り合い、中学生の時受験する学校が違つたことであつたことになつた、有本 美波だつた。他に、細目の女の子、チャライ男、許そつなメガネっ子がいた。

「なんだ？知り合いか？まあいい。酒を飲むぞ」

「は？何て言つたのかよく」

「酒を飲むと言つたんだ。」

「えと、僕たちまだ未成年なんですけど？」

「知るか飲む。」

そつ言ひ一升瓶の口を俺の口に近づけてくるぜ口。

「ちよつやめ。」

「ほれほれ、飲むぞ飲むぞ」

この人……酔つてるな！

「まあ、先に自己紹介だな。簡単にすませろ、能力なんかは後で言え。」

「俺の名前は立花 九です。新入りなので迷子にならないよう見張つといてください。」

「「「「「ああ……あの話を聞いたのか……」」」」」

皆も聞いたんだな……。

「じゃあ、わたしからね。わたしの名前は近藤 三輝って言います。よろしくね。」

「よろしく」

「俺の名前は田嶋 隼貴だ」

そう言うと田嶋はこう言った。

「一つ聞くんが、漫画は好きか？アニメは！小説は！？」

「大好きだっ！！」

「同志よ！！！！」

男の握手をする。この時、俺と田嶋にしか見えない同士の絆がしっかりと繋がっていた。

「私の名前は亀賀 音遠ですー。」

「かめがネおん？」

「かめが ねおんですー！」

そんな風にふざけていると

「井上 祐樹だ」

「知ってるわ！」

「有本 みなみ」

「知ってるよ！！！！」

「終わったか？んじゃ飲め。」

「へっ？ゴブゴボゴボゴボゴボ。」

ちよっ……………息が……………できな……………

「待て」

「嫌だよ待たないよ、ていつか来んなよ」

「待って待っててbギヤッ」

「え？」

そこには血がついたナイフを持った男と、血だらけの

「うわあああああああああああああああああああー!!」

なんだ今の……? 夢、だよな……? そう、夢だ、でもなんであんなにリアルだったんだ?

「どうかしたか立花!？」

「いやなんでもない。」

「本当か？」

「ああ……」

様子を見に来たのは井上。心配して来てくれたようだ。

「じゃあ、行くぞ」

「は？行くつてどいつに」

「きまつてるだろ」



「うつせえ死ねだぼ！」  
「ぐぼあ！」

あれ、何で触れてないのに？

「俺の能力だよ。」

「なっ心を！？」

「そ、俺は風の神の加護。風に威力を乗せて当てたんだ。」

「うっわすっげえ便利じゃん。」

「ああ、とにかく学校行くぞ学校。」

「今ぼくちゃんやられたから動けないや。」

「そうか、なら背負ってやるう。」

「いえ動けますともええ本当に！」

「本当か？無理しなくていいんだぞ？」

ニヤニヤしながらこっちに向かってくる井上。想像してみる、男が男を背負って登校している図を最悪だぞ？

「さーてがっこういくか」

そう言つと俺はカバンを持って出て行つた。

「あ、あいつ迷子にならなければいいけど」

選択決のおかげで迷子にはならず済んだ。

第二話 アギト（後書き）

頑張る。ただそれだけ。

### 第三話 真夜中の学校（上）（前書き）

3000文字……。長いような短いような。

今回は（上）が入ります。多分次が（中）そして（下）になると思  
う。

それでは（上）です

### 第三話 真夜中の学校（上）

コツコツと夜の学校の廊下を歩く音がする。

「うつわーやっべ、ちびりそう。ってかちびっていい？」

「いいけど立花がちびった瞬間俺はダッシュするぞ？」

「ちよっ、そりゃねえよお〜」

灯りが一つもない暗い廊下を歩いていたのは、立花と井上の二人であつた。

井上は、七不思議があるなど多くの心霊現象が語られている夜中の学校を、全く怖がる素振りをせずに淡々と歩きつづけていた。

反対に立花の方は、井上の服を掴み寄りかかりながら歩いている。

立花のズボンは少し湿っていた。

「立花いい加減離れてくんね？俺そついう趣味持ってないんだが。」

「とか言いながら今日の朝の事はなんだったんだ。もしかして私の事はあそびだったの!？」

「あれは冗談だつて……」

こうしてみると普通に友達同士のおふざけに見えるが、立花は本気で怖がっているので強がりと言えるだろう。

さて、立花と井上がなぜ真夜中の学校にいるかと言うと、簡単に言えば『七不思議は能力者のせいだと思っから行ってこい』というゼ口の命令によるものなのだ。

「でもさ〜、こんなに暗いと絶対なんか出るよな!? 七不思議まであるんだぜ!? やっべーマジトイレ行きてえ……!!」

「確かトイレって一番七不思議なんか見つくれる場所だったりするよな〜」

「ギャーーーーー!!! 井上! なんてことを言っただね君は!」

「……いい加減静かにしろよ、立花」

井上が呆れた顔で立花を見る。それでも立花は騒ぎ続けていた。今、立花はかなりのハイテンションなのだ。どのくらいハンテンションかと言うと、修学旅行で肝試しをしている時くらいハイテンションだ。例えになっていないかもしれないが、簡単に分かりやすいだろう。

「それにしても、妙な事に月明かりが入ってきていない……。もしかしたら、本当に化けて出てくるかもしれないな。」

「えマジで?」

「ああ、大マジだ。」

「……俺、これ以上不幸になりたくないから祟りはお前が受けて?」

「やだ」

「お願い はあ〜と」

「もつとやだ」

「なんだと!?! 可愛くお願いしてやってるのに!」

「キモいです」

夜の学校で怖い話をしたりするたびテンションが上がっていく立花、反対に、どんどんとテンションが下がっていく井上。完全に対照的である。

「ま、安心しろ立花。幽霊なんて出てくるわけねえよ」

「おお、やっぱりそうkってそれフラグじゃん！」

「ふ、ふらっ？」

「フラグ立ったよぉ〜マジどうしょ〜。ぼくちん死んじゃうの？」

「ないない。」

「そうだよな。ってうわあああああああああああああああ！？」

「なっ、いきなり灯りが！？」

薄暗い廊下にぱつと灯りがつく。

そして、後ろから足音が聞こえてきて、それはだんだんと近くなり

……音は消えた。

「よっ立ばん」「いやあああああ！ってあれ？林田じゃん。

「ここで何してんの？」「うおっ！いきなり大きい声出すなって。」

後ろにいたのは、クラスメイトの林田はやしだ 壮樹そつぎだった。

「でも、林田何しに来たんだ？」

「ああ、それはなちよつと教室にノート忘れてさあ、取りに来てん。」

「なるほどなるほど。」

「じゃあ、この灯りは林田がつけたのか。」

「ええ？お前らがつけたんじゃないん？」

「は？いやいや、お前がつけたんだろ？」

「いや、だからつけてないって！」

「……林田、それは本当か？」

「だからほんまやって。」

「そっか……。おそらく来るな。」

「来るって何がだよ？」

「きまつてる。」

林田が来た方向からまた音が聞こえる。だがそれは先ほどの様な足音ではなく、ずるずると言った、何かが這いずってくる音だった。

「……この腐臭、ゾンビの臭いだ。どうやら能力者は禁呪魔術師らしい。」

「うわ、やっぱりフラグだったんだ。てことは、相手はフラグ回収者なんすかね？」

「ゾンビ？てゆーか禁呪魔術師ってなんやねん？」

「その話は後だ。今は戦うか逃げるのが最優先だ。」

「うっわ、マジでゾンビじゃん……」

井上が言ったように、廊下を這いずっていたのは下半身と首のないゾンビだった。

「っ」

「あああああああ！……」

「おい、林田怖いと思うが叫ぶな！」

「クツ詰んだか？」

「どうかしたのか井上？」

「あれを見る首がない。ゾンビは頭を破壊しないと死なない、首が取れたら死ぬはずだ。なのに、あいつは死んでいない……」

「げっマジか。」

「あああああ……あああああああ」

「じゃ、じゃあどうすんねん！？」

少し冷静さを取り戻してきた林田が井上に向かって叫ぶ

「どうするも、逃げるしかないだろ！行くぞ！！」

「おお」

「まっ待ってや！」

三人で廊下を走りだす。それに合わせてゾンビもこちらに向かってくる。

が、

「ちよっ、あいつ早すぎだろ！自転車並みじゃん！」

「くっ、皆！どこでもいい、曲がり角を曲がって教室に入るぞ！」

「分かったわ！」

「あああああああつあつあおおつああああああああおおおお  
おおああ」

そして曲がり角を曲がる寸前

「クソッ追いつかれた！」

「どうするん？」

「ピンチじゃない!？」

「こうなったら戦うぞ！立花、選択決でも何でもいい、あの手この  
手を使って倒す方法を考えろ。」

「ああ、分かった！」

「お、俺はどうするん？」

「立花は方法を考えるから、お前はその方法を実行しろ！」

「ほーい！」

「生き残るぞ！」

「「おっ！！」「」

その掛け声とともに、それぞれの役割を果たしに行く。どうやら井上は能力をフルで使って戦っているようだった。

「さて、どうしようか。」

「なあ、俺友達と遊んでた帰りでさあ、サッカーボール持ったんねんけど、これで相手をひるませることってできるんか？」

「おお、確かに！ちよっと待ってくれ林田。」

我が眼前に出でよ！世界仰天不思議パワー！！

選択決

林田のボールを使う  
違う方法を考える

(こつなったら、これだ！)

選択決

林田のボールを使う  
違う方法を考える

「林田！自己紹介の時に、サッカーずっと習ってるって言ったよな！しかもユース！」

「おう！」

「んじゃこのボールをゾンビにぶちかませ!!」  
「分かった！」

林田は返事をするボールをとりだし、空中に投げた。そして、足元に来た瞬間

「オッラ！」

サッカーボールをけり、ゾンビの胸にぶちかました。林田のキック力と正確さは驚異的なのか、5Mほど離れたゾンビにボールが当たるとそのままゾンビは窓を割って空を飛んで行った。

「ナイシユー！」

「ゴール!!」

立花と林田がハイタッチをし、井上が「ありがとな」といった。

「なあーに言っただよ、友達なんだからこれくらいはいいってことうよ」

「そうか、林田も本当にありがとう、あいつ風がきかなくてちょっ

とヤバかったんだよ。」

「風……?」

「まっまあ、まずは一旦教室に隠れようぜ。さっきみたいなのがまた出てくるかもしれないしさ。」

「そっやな。」

「すぐそこに入るぞ。」

「不気味だな……」

「うおっ、こええ……」

「出そうやな……」

立花達が入ったのは、人体模型などがある理科室であった。

第三話 真夜中の学校（上）（後書き）

変なところで切れましたね。でももっと入れたらきりのいいところが無くなっちゃうんです。許してください。

（次は中です）

第四話 真夜中の学校（中）（前書き）

ちよっと長いです。

#### 第四話 真夜中の学校（中）

「ここが一番出そうだよな。」

「大丈夫だ出ない。」

「……お前はどんだけフラグ立てれば気が済むんだ……！」

「なあ、いくつか聞いていい？」

「んん、なんだ？」

「能力とかってなに？」

「……それはこの学校を抜け出してからだな。」

「……分かった。でもぜったいやで！」

「ああ………」

立花と井上は、どうにかしてごまかせないかと思っていた。この前のエルフとは違い、能力に目覚めるものでも巻き込みたくはないのだ。

「……」  
「……」  
「……」

沈黙が続く。しかしそれを終わらせたモノがいた。

がたっ がたたたたっ ががたっ

「「「!?!?!」」」

何かが揺れる音がする。

「あそこからなにか来る!」

井上の視線をたどると、理科室の奥から影が出てきていた。しかも一つではなく、複数のかげだった。

パキャン!  
ガシャ!!

何かが割れる音も響いていく。

……音がしなくなった。周りには影がある。どつちら立花たちは囲まれているようだった。

「くっ 囲まれた!」

「どうするん?」

「またまたピンチじゃん!」

後ろに冷たい感触がある。知らないうちに壁まで後ずさっていたようだ。

するとぱつと電気がついた。

先ほどの廊下のように

「ガッ」

悲鳴を上げたのは井上だった。そちらを見ると、目が黄色に光った人体模型に首を絞められていた。

立花と林田が後ろを見る。そこにはガイコツやカエルの死体、目玉などが蠢いていた。

「そつだ、早く井上を助けないと!」

立花の上を選択決が出る。

選択決

井上を助ける

井上を見捨てる

まずは戦う

(助けるにきまってる!)

選択決

井上を助ける

井上を見捨てる

まずは戦う

「林田、井上を助けるぞ!」

「うあああ!」

「林田!」

「あ、ああ」

やはりうごく目玉やカエルの死体などは怖いのか、少し腰が抜けていた。

そばにあった椅子で思いつきり人体模型を殴る。すると人体模型は粉々になった。そして林田は周りのモノを蹴りで壊していく。

「げほっごほっ　　ハア……ハア……」

「井上?おい井上!しっかりしろよ、大丈夫か!」

「…ハハ……大丈夫に……見えるか……?」

「クソッ、林田、理科室のドアまでの道をつくってくれ!」

「はいよ!」

気持ち良くなるほどの豪快な一蹴りで道ができる。それと同時に立花は井上を背負い、

「うおおおおおおおおおおおおおおお！……！！」

「おら！来んなこの、やつろつッ！……！！」

ドアまでの道を通り切る。林田が周りの敵を処理しているので一切敵は立花と井上の方向へ一切来ない。そしてドアを開け、

「林田！」

「おう！」

林田と一緒に廊下に転がりこむ。すると敵はなぜか廊下にでられないようだった。だが、ノートだけは出てきた。ノートが林田を紙でたたか、全く痛くないようだった。

「ああ、これ！これ俺のノートやん！教室になかったからあきらめてたんやけど……そうかあ、理科室にあったんか！」

「どうやらノートだけが出てきたようだった。」

「おお、よかったじゃん」

「よっしてきた！」

「じゃあお前はもう帰って」

「何ゆーとんねんあほか。ここまで付きあったんやし、皆で学校出ようや。」

「…………俺たちが自らあいつらと戦うって言うてもか…………？」  
「はあ？お前あほやる、何で自らいくね…………それって能力っていつの関係あるんか？」  
「っそ、それは」  
「答えてや！」  
「それはむ」「言つて…………、やれ…………！」で、でもさ！」「いいから！」「分かったよ…………」

立花は真剣な表情で林田を見る。対して、林田も冷や汗は流しているものの、真剣な表情で立花を見る。  
そして立花は話した。ゼロに言われたことをそのまま林田に。  
「いいか？よく聞け、一度しか言わないぞ？能力の事だが」

「というわけだ」

林田の顔は驚愕と期待で染まっていた

「それって俺も加護受けれんのかな！？」  
「分からないが可能性は低いんじゃないの？」  
「あ、あ…………そう、だなゴホッ、可能性は…………低い…………」  
「はあ…………そっか。」

林田は残念そうに下を向いた。

「何残念そうにしてんだよ林田！能力合ったら殺されるんだぞ！？」  
「立花の、言うとおりで！こっちは、人が、殺されてるんだ！」

「……でも」

「でもじゃない！能力なんて正直必要ないんだ！」

「能力つていうのは厄介者、だからな。」

「それでも、俺も能力あつたら戦えるやんけ！」

「……一つ聞くけどさ、林田は俺たちと今日仲良くなったんだ。なんでそんなことをしたいんだ？」

「そ、それは！」

「お前はほとんど無関係なんだよ！！前、能力の事を知らないのに、能力を持つてるだけで殺された人がいたんだ！お前まで殺されたいのか！？」

「っ！……ごめん、そっちの気も考えずに……」

「……いやいいんだ。こっちもちよつといいすぎた。」

もう一度重たい沈黙が訪れる。

今回の沈黙を破つたのは井上だった。

「ヤバいな、集霊し始めてる」

「集霊？」

「そのしゅれい……しゅうれいってどうヤバいんや？」

「集霊は霊を集めてるんだ。能力だな。」

「でも、霊が集まるとどうやばいんだよ？」

「まず霊が人、物、力が強い霊だと空気に取り憑いたりしてくる。」

「ほうほう。」

「そうなると人や物が襲ってくるつえに、空気を操られて窒息させることだってできる。」

「……それつてもものすごくヤバいんちゃうん？」

「ああ、ものすごくヤバいな」





「やね？」

一瞬にして復活した立花がそう呟く。それに井上、林田も反応する。

「確かに……もしかしたら………」

「ほんま不気味やなあ……」

薄暗い廊下はほこりまみれで生徒が真面目に掃除していない事が分かる。

「まあいい。ここから学校を出るぞ」

「つーことは玄関に行くのか？」

「ここは三階だぞ？一階の玄関口までいってる間に集霊されたらどうする？おしまいだぞ？」

「確かにそうやな……でもそれやったらどう行くねん？」

「簡単だ」

そう言つて井上は一息つく。そして次に信じられない言葉を発した。

「ここから飛び降りる。」

「あつそんじゃ死ね。」

「あつごめんな、急用思い出してもうたわ。じゃな」

逃げだそうとした立花と林田の首を井上が掴む。

「「ガフッ!？」」

「待て、死にはしないさ。俺の能力を忘れたのか？」

「うつつう死ぬ……ゴフッ…親父、ごめん先立つ親不孝をお許し下さい……」

「うん？おつとごめんごめん。」

井上が立花と林田の首を絞める力を緩める。といつてももう林田は手遅れであったが

「で、お前の能力がどうしたんだ？」

「……………」

「ああ、そのことなんだが……………林田、起きないと……………」

井上が林田の耳元でなにかを囁く。その瞬間、

「はい、起きます。是が非でも起きるでえ！！？」

明らかに血色の悪い顔をした林田が復活（？）したのだった。井上が林田になにを囁いたかはご想像にお任せする。

「さて、話をするぞ。」

「ああ」

「おつ」

「よしまずおれの能力は風だな？」

立花と林田がうなずいたのを確認すると井上が話し始める。…この時点で井上>>>越えられない壁>>>立花⇄林田  
という力関係がほぼ成り立っていた。

「つまり飛び降り風で落ちる速度をゆるめる。そうすれば死ぬことはなくなる、分かったな？」

「YES」



「ん？何でだ？」

「……敵が俺達逃がすというへまをすと思うか？」

「せーへんのちゃう？相手のには俺達って絶対殺したいんやろ？」

「ああ、そうだ。」

「でもそれがどうしたんだよ？」

「つまりだな……俺たちが門を開けても出られないように魔法の結界が張られている可能性が高い。」

「あっ」

「またまたピンチじゃん」

「もともと門は開けている間、そういうのが張られたとしても門が魔力放出の役割を果たし無効果するのだが……」

井上が林田を恨めしそうに見る。

「お、俺かいな？」

「……お前以外にだれがいる？」

後で林田は井上に肉体言語でお話することになりそうだった。

「でもさでもさ、何でそんなことができんだ？」

「ああ、それはだな。」

「ゼロがこの高校の理事長の娘だからだ。」

立花と林田が呆然となる。

林田はゼロの事を知らないが、能力者ということは知っているので驚いているようだった。

「それにしても、グラウンドか。どれほどの奴が来るんだ？」

「どういうことだよ？」

「そうかお前は分かっているのか。」

「む、どういう意味だ」

「そういうのはいい時間がないから簡潔に話す。

俺たちは……」

誘導されている。」

「なっ!？」

「へ?へ?どういうことやねん?」

「それはだな、まず林田がこの学校に来たことから始まる。」

「ふむふむ」

「まず林田は門の役割を知らず門を閉める。これによって結界発動。そして次に第三校に行った林田を、第二校舎へ行かせる、まあノートがないからさまよう訳だ。そして林田が俺たちと遭遇、タイムミングを計らったようにゾンビが出てくる。それに逃走。この時俺たちがゾンビを倒したのは想定外だったろうがまだ大丈夫な域だったんだろう。そして俺たちに一番手前の教室、理科室に入らせ戦わせる。そして逃げたところに林田のノート、これで帰ろうと林田は言う。俺たちは奴らと戦おうと言うが、集霊が始まる。そしてなぜか第三校舎だけは集霊していなかった。」

第二校舎は窓から落ちると道路。第一校舎はグラウンドだが第二校舎と繋がっていない。となるとグラウンドに落ちる第三校舎に俺たちを誘導させ窓から落ちさせる。人間というものは一度何か怖いことが起きるとそこに近寄りたくなくなるものだ。ゾンビや理科室とは反対側の第三校舎へは簡単に誘導できる。つまり、



第四話 真夜中の学校(中) (後書き)

次は(下)です。

見てください。

第五話 真夜中の学校（下）（前書き）

短いと思います。

最後の方ちょっとヤバいです。

でも作者の力量ではここまででした。  
それでは六話目ですどうぞ。

## 第五話 真夜中の学校（下）

「ワイバーン……?」

「ああ」

「ゲームなんかによく出てくる奴?」

「そうだ、そのワイバーンだ。」

「ワイバーンってあんなにでかかったっけ?」

「それはあの狩りのPFPのソフトと同じだ。画面があるから小さいが、現実ではものすごく大きいというわけだ。」

くだらない話を立花たちがしている間にワイバーンは翼を広げている。そして骨の口を大きく開けた。

直後、ゴウツ とグラウンドを冷蔵庫の中にいるような冷気がおそった。

「っ 寒ッ!!」

「アンデッド・ルーワイバーン!? どうやってそんな代物を!?!」

アンデッド・ルーワイバーン

生前ワイバーンの群れの長だったものがゾンビとなったものだ。このワイバーンは、炎ではなく氷のブレスを吐く。

「くっ 立花、林田!俺が能力を使って時間を稼ぐ!その間に逃げる!」

「井上!？」

気付けば井上は能力をフルに使って、単身でワイバーンに向かって走っていた。

それを見た立花と林田が追いかけてよとすると、井上が放った言葉により動けなくなる。

精神的に動けない部分もあるのだろうが、井上が風で見えない壁をつくっているの、それによりうごけないのだろう。

「そっや!立花、お前の能力使って俺らがやらなあかんこと、決めてや!」

「ほわあ!?!おまっ本気で言ってるのか!?!」

「当たり前や、俺らが逃げて井上が負けて、見つかったらDEAD ENDなんてやめてほしいんや」

「でも井上は逃げるって……」

「それが一番の最善なんか?」

「……分かったよやってみるよ」

### 選択決

二人で逃げる

三人で逃げる

三人で戦う

## 選択決

二人で逃げる

三人で逃げる

三人で戦う

「井上、林田！三人で逃げるぞ！」

「逃げるってどこにや？」

「集霊していない狭い場所だ！」

「え、何で？」

「そっちの方が敵も動きにくいはずだ！」

「分かった、風邪で速度をアップして逃げるぞ！」

「ああ！」

そして井上がワイバーンに背を向けた瞬間

「え……？」

「い？」

「う……あ……」

井上が氷像と化していた

「え…………？な…なんで…………」

バタリ、と氷像が倒れる音がする。立花は驚きに満ちた顔でその氷像を見つめていた。立花の口を出た声は裏返っていた。

立花が氷像の後ろを見ると今まで溜めに溜めた氷のブレスを吐いたワイバーンがいた。

その光景を見た立花は

「なんだよ、なんなんだよ……………なんで、なんで……………なん、だよっコレエツ！…！」

「嘘やる…………？」

(俺のせいだ……………俺が三人で逃げようなんて言ったから……………！)

「……………立花、あんまり自分を責めてないでさっさと井上背負え。逃げるぞ」

「……………ああ分かった」

立花は足元がおぼつかない様子で立ち上がると井上を背負う。

「いくで」

「ああ……………」



俺達は生き延びた。どちらかと言うと、日が昇ってきただけなのだが。

ゾンビは日の光に弱いらしい。日が少し見えた瞬間消えていった。それは逃げ始め少したった後だった。

あれ……？なんか大事なことを忘れてるような……

え？井上？……何言ってるのさ。第一井上って誰さ

俺？俺の名前は立花 九に決まってるんじゃない？バカなの？死ぬのは……井上、井上ああ、あの人形の事か？あれはいい作品だよ。皆が燃やしちゃったんだけどね。泣きながら皆言ってたよ、「どうして死んじゃったの」って

バカだね〜人形なんだから命なんてものあるわけないのに。

林田？ああ俺の親友か。あいつ風の力が使えるんだぜ？すげえとおもわねえ？

まあ、俺も能力あるんだけどさ。



気持ちよくてたんのしっいな」

立花の能力は進化していた。

狂気をつかさどる邪神と、快樂をつかさどる邪神、そして娛樂をつかさどる神の三神に加護を与えられたことによって……

選択決

計画通りに殺る  
少し変えて犯す  
なにもしない

選択決

計画通りに殺る

少し変えて犯す

なにもしない

「いつ嫌、やめて!」

「ククツ気持ちいい悲鳴だよ。」

「いやあああああああああああああ!...!」

「ニユースを始めます。わたくし、これから新しくキャスターを務めさせていただきます。日川<sup>ひがわ</sup> 涼子<sup>りょうこ</sup>と申します。先日、指を全て切り落とされ、明らかに苦痛を与えられていたことが分かる変死体が、前キャスターであることが判明しました。

犯された跡があり体液を調べていますが、出てくるのは全て前キャスターのものだけであります。

これからより一層警察は調査を進める模様です。」



第五話 真夜中の学校（下）（後書き）

はい〜拍手〜

ついに立花くんもエルフみたいに狂気に飲み込まれちゃいましたあ。

ドンドンぱふぱふー

今ならエルフ達と仲良くなれるはず!?

でもまあいつか狂気が消えてもがき苦しむはずです。

狂気の邪神に目をつけられている間は狂気にとらわれ続けます。その代わり、かなり強力な能力も手に入りますが……

快樂の邪神もまた同じです。

それでは

さようなら

## 第六話 神々の会議（前書き）

今回ふざけています。

短いです。会話文ばかりです。

それでも読みたい方はどうぞ。

## 第六話 神々の会議

そこには神話に出てくるような、神々しい気配を纏った……訳がなく、確かに纏ってはいるがそれ以外の何かでオーラが無くなっている者たちが集まっていた。

「うーっし皆あつまつたかー んじゃ、第一回、『GAMEは一体誰の手によってエンドするのか!』 会議を始めたいと思いまーす。」

「……………イエー!」

「それでは自己紹介を」

「はいはーいわしはオーディンなのでーす。え?キモい?こまけえこたぁいいんだよ!」

「同じく、んあ同じくなんすかね?とにかくトリック・オア・アトリート!あれ?合ってるか?ハロウィン?まあいつか。ロキです」

「最高神と名高い神とはわしの事!最近ポセイドンをやってみようかと思うんじゃが……どうじゃろうbソゼウス」

「いいぞいいぞーもっとヤれ」

「こどもも作れよ!そんな時は最大級の悪戯してやるぜ!」

「カオスですね……」

「混沌の神だけに?」

「おおっカオスよ、来ておったのか!」

「（ゼウスウゼエ…）」  
「おっと自己紹介続けるー」

「俺アンラ・マンユで…どうかな？」

「いや、どうって聞かれても」

「いやな、最近あるゲームやったんだが…そのなかでは俺の名前、アンリ・マユだっけ？そんなやつでさ、夢を壊したくないんだよ。ほら？俺ってこんな性格じゃん？」

ゲームの方は確かケケツ みたいな笑い方してたし…」

「もういい次だ次」

「ひどっ!？」

和気あいあいとした空気の中自己紹介が続いていく。  
本当に力オスな状況だ。

「あれ？誰か呼びました？」

「ん？どうしたよ？あつ、ついに頭が？うっし悪戯してやんよ」

「おかしくなつてない！ていうかそこから何故悪戯に!？」

「んあ、悪戯したら直るんじゃないか、そう思ったんすよ」

「自己紹介しろっつーの」

「あつすみません。混沌の神力オスです。ゼウスに（脅されたので）付いてきました。これで（あれを散らしたくないので）いいですか？」

「んあいいぞー。」

「次々イ」

「ニッポン代表、天照大神じゃ！エツヘン!」

「次誰だ？」

「ひどいっわらわの扱いが酷すぎるのじゃっ!」

「アマテラス……っ!!」  
「アンラ……っ!!」  
「うわああああん」

天照とアンラが目と目を合わせる。その瞬間、何かを通じ合ったようにうなにうなずいた二人は名前を呟き、抱きしめ合いながら泣いていた。

「きみの気持ちは分かる！ぐすっ…大丈夫だぞ俺がいる」  
「ひぐっ…えぐっ…ありがとう…なのじゃっ！」

「うわああああああああん!!」

「あそこのブワアカはほっといてだな、自己紹介続ける」  
「ん、俺かよ…クー・フリーンだ。よろしくな、ついでにあそこのバカが許せないんで殺っていいか？」  
「うむ、よいぞ！」

「おう、んじゃ死ね」  
「オベゲラッ!!?」  
「アンラアアアッ!!」  
「ガッ、ガフッ…あ、アマっ…テラス…」  
「いつ、嫌じゃ！死ぬなのじゃ！」  
「ごめん…約束守れなかった…ぐっ…」  
「わ、分かったのじゃ！だからもう喋るなのじゃ！」  
「本当にごめん」



「「そつだな」そつじやな」やっぱり

「

三柱から加護を受け持った若者かねえ

## 第六話 神々の会議（後書き）

まだまだ、ふざけた話はまだ終わらんよ！な精神を持つ人間糞管です。

次回も期待しないでください。

それでは

さようなら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128y/>

---

GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

2011年12月14日18時57分発行